
米花町の怪談

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

米花町の怪談

【Nコード】

N2286A

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

怪談とはありますが、お笑いです。主な登場人物は、本庁の刑事さん達です（^^）

「あゝ、今日の部活もハードだった。

ねえ、蘭。『レール・デュタン』でケーキ食べて帰ろうよ。」

「うん。けど、コナン君もおなかすかせて待ってると思うし」

「子持ちは大変だね」

「でも、ケーキは食べたいから、お土産に買って帰ろうかな」

と言うわけで、蘭と園子は、今、米花町で大評判のケーキ屋の前までやってきた。

「蘭、あれ、ほら。ヤクザにからまれてるの、高木刑事じゃない？」

ケーキ屋の明かりから少し外れた、薄暗がりの中にいる二人の男の片方は、

確かに高木刑事である。

高木刑事の背後にも、もう二人男がいるが、顔はわからない。

”高木刑事、囲まれてる！”

蘭は思わず駆け出した。

高木刑事と、人相の悪い男の間に割って入り身構える。

「ちよつと、あなた、高木刑事に何の用なの！」

遅れて園子も応援に入る。

「そうよ！こつ見えても、蘭はね、空手の都大会優勝の凄腕なのよ！」

ヤクザは一瞬、ひるんだように見えた。

蘭の背後から、高木が消え入るような声で言った。

「あ、あの、蘭さん。違うんです・・・」

1分後、蘭と園子は、苦笑いする高野刑事に、

コメつきバツタのように頭を下げていた。

「まあいいって事よ。もう気にしなさんな」

「薄暗くて、白鳥警部や、千葉刑事もいらしてると気がつかなかったの」

蘭は、真っ赤になって言った。

「しかし、高木君もなさけないですね。蘭さんに、かばってもらうとは」

白鳥警部が言った。

「それにしても何でこんな所に、刑事さんが4人も？
もしかして事件？」

園子が嬉しそうに聞いた。

千葉がはちきれんばかりの笑顔で言った。

「聞きたいですか？」

その笑顔に蘭は何か不吉なものを感じた。

断ろうとする蘭よりすばやく、園子が、うれしそうに言った。

「聞きたいです」

千葉が話そうとするのを白鳥が遮った。

「ばかばかしい、非科学的な話をしないで下さい。千葉君。

私が、わけをお話しましょう。

実は、佐藤さんが、過労で、倒れてしまいまして、そのお見舞いに、今、女性に一番人気の、ケーキ屋のケーキを持っていこう、という話になったんです。

男4人が同時に、ケーキ屋に入るのもなんですから、誰が、どんなケーキを買うかを、

ここで、相談していた、という、ただそれだけの話です」

「佐藤刑事が過労。お仕事大変なんですね」

素直に、心配する蘭だった。

しかし、園子は、素直ではなかった。

「ねえ、千葉刑事。私、非科学的な話、大好きよ」

「でしょ。実はですね」

「おい、千葉、止めるよ」

「いいじゃないか、高木。彼女は聞きたがってるんだぜ」

「そうよ、高木刑事。おもしろそうな話を期待だけさせるなんて、大罪よ。」

このまま、帰したりしたら、夜中に、生霊になって夢枕に立ってやるから」

笑いながら言う園子に対して、

千葉刑事以外の男3人の視線は、頼りなげに宙を泳いだ。

「事の起こりは、米花親水公園での殺人事件です」

「ああ、交際中の女性を、提無津川に生きたまま錘をつけて、沈めてしまった、あのひどい事件。」

数学の先生が、以前勤めてた学校での教え子だったことで、ひどく嘆いてたわ。

『髪の毛長い美人で、優しい子だったから付け込まれたんだ』って。でも、確かすぐ、犯人つかまってたような」

「そうなんですよ。」

ところがこれが、ふてぶてしい奴で、証拠を突きつけても、のらりくらりと、

白々しく言い訳して、なかなか、自分の罪を認めなかったんです。

佐藤さんは、何日も、奴が絶対に逃れ様もない証拠を探すために、公園の中を探し回ったり、証人を探したりしたんですよ」

「それで、過労で倒れたんですね。佐藤刑事」

「そうなんですよ、蘭さん。それなのに、千葉刑事と来たらばかばかしい事を」

蘭に答える白鳥の言葉を無視して、千葉は続けた。

「で、昨日の事なんだけどトメさんが、本庁に電話をかけてきて、僕がたまたま出たんですがね、

『おい、千葉。美和ちゃん、川の中から出てきた携帯見た途端、

引つつかんで、車に飛び乗って行っちまった。

まだ、こつちじゃ何にも調べてないし、ガイシャのものと決まったわけでもない。

とにかく、そっちに美和ちゃんがついたら、まず、鑑識に渡してくれ、って言ってくれ。

美和ちゃん、なんかに、とり憑かれたみたいに、捜査して

様子がいつもと違ってたから、ちよつと心配でね」

「ええ！？それって・・・」

蘭は、一歩後ずさりながら、園子は、身を乗り出して言った。

白鳥が、苦虫を噛み潰したような表情で言った。

「千葉君。事実を脚色しすぎてます」

「自分はただ、トメさんが言ったとおりに、再現しただけですよ」

「佐藤さんは、自分と同じように小学校時代、父親を事故で無くした被害者の状況に同情していました。」

そのせいでいつもより少しばかり、捜査に熱が入っていただけです」
白鳥は言い切った。

「死んだ人に同情したり、自分の状況が似てると、とり憑かれやすいのよね」

「や、やめてよ、園子」

二人の高校生を見た白鳥は両手を軽くあげて肩をすくめた。

「妹も、学生の頃は、占いやらに凝ってましたが、

女性と言うのは、こういう非科学的な話題がお好きなんですね」

「私は嫌いです！」

「千葉刑事、さあ、続き、続き」

蘭を押さえつけて、園子は、千葉に詰め寄った。

「それで、僕は気になって、廊下をうろろしてたら、

佐藤さんが、僕の横を何も言わずに通り過ぎようとしたんですよ。

僕が声をかけても返事もせずに、被疑者の取り調べ室の方に行こうとするし、

たまたま、通りかかった高野さんも無視するし。

高野さんが心配して、佐藤さんの肩を持って止めようとしたら、すごい勢いで、吹っ飛ばされましたよね」

「あ、あれは、油断してただけだ」

「あれは、いつもの佐藤さんじゃなかったですよ。絶対。

で、そのまんま、僕らは佐藤さんと、取調室に入りました。

中には、被疑者、高木、白鳥警部がいました。

佐藤さんは、中の二人に挨拶もせず、

いきなり携帯を被疑者の顔の前に突き出しました。

被疑者の顔色が変わりました。

携帯からは、汚い水がぼたぼたと落ちて、机の上の書類を汚しましたが、

佐藤さんはお構い無しです。

その時、その携帯が鳴ったんです。

部屋の誰も、動けなかったですね。

水の滴る携帯から、呼び出し音は鳴り続けました。

と、被疑者がいきなり、佐藤さんの手から、電話を引ったくったんです。

そして、床にたたきつけようとした途端、携帯から声が・・・。

『一緒に行きましょう』

被疑者はすごい悲鳴を上げて、床にぶっ倒れて、

佐藤さんも崩れるように、高木刑事の腕の中に・・・」

「やるじゃん！高木刑事」

園子の言葉に照れくさそうに頭を掻きながら、

背後からの白鳥、高野の針のような視線を感じる高木であった。

一方、蘭は硬直して声も出せなくなっていた。

「とにかく、佐藤さんは過労なんです」

言い切る白鳥に、千葉が、からみつくような笑顔で言った。

「佐藤さんは過労かも知れないけど、奴は、どうなんでしょうね」

「『かも』じゃなくて『過労』」。

それに、千葉。奴には、俺らの知らない持病でもあったんだ！」

たいていの人間なら、震え上がるような、高野の凝視を気にも止めず千葉は園子に向かって話の続きをした。

「奴は、取調室で倒れて、ひどく苦しみましたので、急いで病院に運ばれました。」

でも手の施し様もなく死亡。

原因を調べるために検死の運びとなったんですが、

その結果、死因はなんと、『溺死』」

「『溺死』？うそぉ」

「そうなんですよ、園子さん。」

解剖したら、肺の中に水が一杯だったそうです。

おまけにその水を分析したら、なんと提無津川の水だったんですよ」

「あの、それ何かの・・・間違いで・・・は・・・」

やつの思いで出した、かすかな声で、蘭が言った。

「間違いです」

きつぱりと白鳥は言った。

「肺に水が溜まる病気はたくさんあります。」

奴は自堕落な生活を送っていたから、きっと、何らかの、詳しい検査をしなければ

分らないような病気を持っていたに違いないんです。

それに、提無津川の水の件だって、検査用の試験管を運ぶ時、

水質検査用の、サンプルを運んでいた、人とぶつかって試験管が、混じってしまったんです」

「そういう話は確かに聞きましたが、試験管にはラベルが貼ってあるでしょ？」

「人間は信じられないような、間違いをするもんなんだよ、千葉」高野が、凄みのある声でいった。

「それじゃあ、なんで水に濡れた携帯に電話がかかってきたんでしょうね」

「たまたま、うまく間違い電話の電波が通ったんだよ！」

「なんか、非科学的ですね」

「何だところ、千葉」

「まあまあ、高野さん。それはとにかくとして、ケーキ何にしまし
よう？」

蘭さん、女性に特に人気のケーキってどんな物でしょう？」

千葉と高野の間に入った高木は言った。

「ケーキより、なんかもっと栄養のつくものの方がいいんじゃない
の？」

『取り殺される』っていうくらいだし、霊に憑かれるとすぐ体力
消耗するそうよ」

園子の言葉は、千葉以外の刑事達と、蘭に無視された。

4人はケーキについて必要以上に熱心に話した。

園子はふと、蘭の肩につく抜け毛に気がつき指で、つまんだ。

蘭はそれに気づかず高木達と話を続ける。

と、その様子を見ていた千葉の目がきらめいた。

そして、園子はそのきらめきを見逃さなかった。

二人の視線が絡み合った。

言葉にならない企みが、成される。

ケーキ談義に集中している、4人に気づかれないよう、

園子は千葉に、蘭の髪の毛を手渡した。

千葉は、何気なく、園子から離れ、白鳥警部の背後に立ち、

その肩から何かをつまみ上げるしぐさをした。

そして驚いたように声をあげる。

「あれ、白鳥警部。こんな長い髪、一体どこでつけたんですか？」

千葉の指先には、白鳥のウェーブした髪とは明らかに違う、

しなやかにのびた髪があった。

高野がしわ枯れた声で言った。

「し、白鳥、それ、あのガイシャの・・・」

一瞬の沈黙。

男3人の叫び声が上がろうとした。

しかし、それより一瞬早く、空手の気合で鍛えた蘭の悲鳴が響き渡った。

「ああ！蘭！待ってよお」

園子の制止の声も聞かず、蘭は、走り去った。

園子は千葉にすばやくウインクすると、蘭のあとを追った。

ケーキ屋の近くにいた人々が、胡散臭そうに、

高野を始めとした男4人組を見つめた。

「警察を呼んだ方が良いんじゃないの？」

という声が聞こえる。

刑事達は、何事もなかったかのように、その場を立ち去った。

「で、ケーキどうするんですか？」

「お前のせいだぞ、千葉。あんな話するから。あれ、白鳥さん、どちらへ？」

「ケーキには、けちがつけましたからね。」

やはり、過労の佐藤さんには、もっと栄養がつくものがよいでしょう。

幸い、私の知り合いに、老舗の鰻屋がありましてね、今から、そこでお願いして

佐藤さんのお宅の晩御飯に特別な鰻料理を作って出前していただくかと」

「おう、白鳥。ぬけがけかよ」

「とんでもない。ただこれは、私の「つて」ですからね。では」

白鳥の後姿を見送るしかない、3人であった。

「おい、千葉、高木！金を出せ」

「へっ！？」

二人は、啞然として、高野を見つめた

「肉を買っただよ」

「肉・・・ですか？なんで」

高野の剣幕に押されながら、高木は聞いた。

「美和ちゃんに精つけてもらうんだよ」

「ああ。取り憑かれたから、ですね」

千葉をにらみつける高野の視線は、焦点の集まった本人より、側にいる高木の方の背筋を凍らせた。

「金を出し合えば相当いい肉が買えるはずだ。」

美和ちゃんを心配してるのが、白鳥だけじゃないって、分かっただけでもないとな。

「さあ、千葉、高木行くぞ！！」

高野のあとを、二人の刑事は、一人は楽しそうに、一人はへたりながら追ったのであった。

（おまけ）

「ねえ、お母さん。『日本のお嬢様訪問』なんて番組、面白くないわよ。」

「チャンネル変えていい？」

「だゝめ。しっかり見ておきなさい」

「だって、私『お嬢様』じゃないわよ」

「『お嬢様』じゃないから見るのよ！

美和子あんな何も感じないの。このお見舞いの品を見て」

「美味しいじゃない。有名な鰻屋さんよ。ここ。」

さすがお金持ち白鳥君のお見舞いね。

お母さんだって、晩御飯作らなくて済んで喜んでたでしょ」

握りこぶしを作って目をつぶった佐藤の母は言った。

「おまけに、高木君や千葉君、高野さんのお見舞いと来たら」

「松坂牛のステーキ肉でしょ。」

「すっごい霜降り。明日が楽しみだわ〜。」

高木君達、無理したのね」

「美和子〜。女性にお見舞いと来たら、花かケーキでしょう。」

それが、どの人も、こんな色気のないものばっか。

あんた一体職場でどんな風に仕事してるの？」

「どうって、普通よ、普通」

母親はため息をついた。

「本当に、一生懸命育てたのに、どうして殿方が、花を贈る気にもならない

色気のない子に育っちゃったのかしら。

草葉の陰から見守ってくれているあの人に申し訳ないわ」

エプロンを目に当てた母親の気をそらそうと、佐藤はあせった。

『次のお嬢様は、鈴木財閥ご令嬢、鈴木園子様です』

テレビの声に佐藤は、救われた気分で、声を上げた。

「ほら、お母さん、この子、毛利探偵の所の、蘭さんのお友達なのよ。」

高木君から聞いたんだけど、なかなか推理力もすごいんだって」

「あら、そうなの」

テレビの画面にはのびのびとテニスをする園子の姿が映っていた。

「女の子らしいし、健康そうで良い子ね。」

身近にこんな素敵なお嬢様がいるんなら、美和子、あんた見習いなさいよ」

母親がそう言った途端、仏壇の中の父親の位牌が倒れた。

「ほらごらんさい、お父さんだってそう言ってるのよ」

立ち上がって、位牌を手にとった美和子は、それに、軽くキスして言った。

「あら、きつとトラックが近くを通っただけよ。」

でなければ、お父さんはきつと私は今のままでいい、って言ってるのよ」

「本当に、死人に口なしだと思って、勝手な事を言って。」

さつさと、あなたが殉職してしまうから、こんなわがままな子になるんですよ。

あとで、じっくりお話ししようね、あ・な・た」

位牌をにらみつけた母親に、佐藤は声をかけた。

「まあまあ、お母さん。早くご飯食べましょうよ」

仏壇に位牌を置いた佐藤は、再び食事を始めた。

僅かに位牌が後ずさりしたことに、鰻に集中した二人は気づく事はなかった。

（おしまい）

（後書き）

（なんじのたわ言）

31巻のお話で、アニメ化の題は「網にかかった謎」

このお話が放送された時、お邪魔していたBBSで

「水に漬かった携帯が鳴るのはおかしい」という、ツッコミ（^^）がありました。

その時初めて、「携帯は、水に漬かると壊れるんだ」と知った私（^^;）

しかし、「じゃあ、水に濡れた携帯が鳴る時があるとしたら、どんな時だろう？」

と思っただきたのが、このお話です。

その後、次から次へと、3台（これ以上増えない事を祈る（TT））

携帯をズボンのポケットに入れて、洗濯してしまい

水に漬かった携帯は再起不能になると言う事が骨身にしみた私です・
・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2286a/>

米花町の怪談

2010年10月10日23時31分発行